

## 産業クラスター論と農村

### - 発展途上国における農村クラスターの一考察 -

#### 《 概要 》

神戸大学経済経営研究所 大鶴舞子

#### 背景

国の競争優位との関連で「クラスター」という言葉を定着させたのはポーターといていい。クラスターに類似する事象の研究はポーター以前から数多く行われており、本格的に政策に導入されはじめた 1990 年代以降、クラスターは先進国の競争戦略や地域開発政策だけでなく、発展途上国でも広く応用されている。第3のイタリアといわれる地域に代表されるヨーロッパでのクラスターの成功は、ポーターのクラスター論と前後して、発展途上国におけるクラスター・アプローチ導入に大きく影響を与えてきた。UNIDO は、ヨーロッパの先進的な事例と発展途上国での現状について議論する中で、ヨーロッパの成功事例が発展途上国の中小企業支援や地域経済開発政策に魅力的である主な要因として、伝統産業でクラスターが活躍し、国際的にも高い競争力を維持することで成功を収めたこと、雇用と付加価値においても、他の地域に比べてクラスターが属す地域が成長を記録したこと、また、比較的周縁かつ工業化されていないセクターが脚光を浴びたことを指摘している(Humphrey and Schimitz 1995)。このクラスターの雇用と所得創出効果と中小企業と地域への密着性が、行き詰まっていた途上国の中小企業政策や地域政策にとって新しいモデルと見なされ、新しい開発アプローチとして展開している。

#### クラスターとダイナミズム

ポーターによると、クラスターとは「特定の分野において相互に関連する企業やサプライヤー、関連サービス・プロバイダー、支援組織から構成され、様々な形態の外部経済で結びついている地理的に近接するグループ」(Porter 2003)である。地理的な集積という意味では、日本でも従来から研究されている産業集積もクラスターと類似した概念であり、清成・橋本(1997)は産業集積を「ある狭い地域に企業が多数立地して一定の製品を共同して生産する『場』」と捉えていることから、ポーターの定義とかけ離れてはいない。イタリアから発信され発展途上国でも研究されてきた Industrial Districts もクラスターのひとつの形態と言えるかもしれない。

集積の経済について、Marshall は、主に情報スピルオーバー、特化と分業、熟練労働力のプールを挙げている。近年のクラスター研究では、クラスターを形成し、成長させる要因について、クラスターが創出するダイナミズムこそが重要であると強調されてきた。このダイナミクスは、Ketels (2003)が指摘するクラスターの4つの経済的便益、つまり、高い効率性と研究開発、イノベーション力、そして柔軟なビジネス形成力から創出される。このダイナミズムは、クラスター内で行われる多

様な学術的・文化的活動、活発な対内・対外コミュニケーション、ニーズの共有、シナジー促進による構造的不安定性の克服などを前提要件とする(Malmberg, Solvell and Zander 1996)。企業が孤立しては得ることが難しく、企業はクラスターに立地することで達成できるものである。

### ダイナミズム創出に関するモデル

ポーターはクラスターを構成する4要件(需要条件、要素条件、企業戦略・競争環境、関連・支援産業)をダイヤモンドと呼び重視している。ダイヤモンドの4つの要件はそのどれもが成功するクラスターには不可欠であり、各要素が共鳴しあうことにより、クラスターは成長していく。ダイヤモンド・モデルは、要素とインフラストラクチャーのアップグレードと特化、洗練された需要、激しいライバル競争などによりクラスターにダイナミズムをもたらす、クラスターを成長させ、イノベーションのエンジンとなる(Solvell, Lindqvist and Ketels, 2003)。また、これらの4要件は相互作用し、特定の企業やクラスターに影響を与える。最も弱い要件は、クラスター全体の質に大きく影響するなど、これら要件はシステム効果(4要件がシステムとして働く効果)を生み出す(Ketels 2003)。

### クラスターと発展途上国

発展途上国を対象にした開発プロジェクトとしてクラスターを政策の対象とするとき重要になるのは、クラスター内の企業間・組織間ネットワークの緊密さや活発さ、発展度合いなどダイナミクスが働きうる状態であるか、またダイナミクスが働いている場合でもその程度・形態はどうなっているかという、ソフト的特長である。クラスターのソフト面の違いによって政策支援の仕方は大きく異なってくる。クラスターは同質ではなく、同じハード的側面を有している場合でも注意が必要となる。

クラスターを構成する企業や関連・支援組織の間をつなぐネットワークはクラスターを機能させる重要な特徴であるが、停滞しているクラスターでは、成長しているクラスターで自然に機能しているネットワークが十分発生していない状況にあるといえる。

また、ダイナミズムがあればクラスターは発展あるいは成長し、またその発展や成長が永久に続くだろうか。一般的なライフサイクル論と同様に cluster にも成長期があり、かつては dynamic cluster であったクラスターも負のロックイン効果によってクラスター内の競争・協力システムが硬化し、停滞期に入る可能性も十分にありえる。負のロックイン効果が発生する局面において政策に求められるのは、藤田(2003)も指摘するように、いかに正のロックイン効果を大きくし、あるいは活性化させ、低迷する状況から脱却するかが課題となる。

### ケーススタディ:インドネシア A 村木工家具クラスター

A 村(desas)は、中部ジャワ州にあり、Klaten Regency 中心部から北東に 28km、州都 Semarang から113km に位置し、Yogyakarta と Solo の中間といえる。面積は 134.3ヘクタール。人口は 3817 人である。A 村には古くから熟練大工の歴史があり、スカルタ王朝時代には王朝大工として多くの大工が木工家具生産に携わった。近年になり、1970年代から1980年代にかけて一般向け家具の需要ブームがあり、A 村家具産業も発展した。1990年代に入りバイヤーや仲介業者が村にやっ

てくるようになり、輸出向けアンティーク家具の生産に転化した背景をもつ。

A 村木工家具は 730 の SMEs から構成される。うち、Microenterprises が 637 と約 9 割に登り、残りを小企業が 76、中規模企業が 17 となっている。このうち 450 社が家具生産に従事し、その他企業のほとんどは、木材業者や家具関連機械工場、製材所などの木工家具支援産業といえる。年間売上高は開きが多く、少ないものは約 Rp.10 million となっており、中規模企業になると約 Rp. 600 million のものもあり、クラスター内での格差は大きいと言える。

A 村木工家具クラスターが直面するダイヤモンド構造は、ポーターが示すダイヤモンド・モデルと比べ、4条件それぞれは低迷しており、そのため要素間のポジティブな相関は見られない状況である。集積がもたらす集積の経済についても労働者のプールやサプライヤーの集積など一部発生しているように見えるものの偽装失業や遠隔地ゆえの集積の側面も否認しない。提供する財・サービスの種類や技術レベル、企業形態などを含め、多様性は発生しにくい現状である。つまり、クラスターが機能するためのダイナミックな要素を有するに至っておらず、dormant cluster であるといえる。また、A 村クラスターは家具生産においてスラカルタ王朝以来の歴史はあるものの、輸出市場に転換してからはまだ日は浅く、その技術的な面でも未熟であることから incipient cluster でもある。立地特性上、都市部から遠く、また Jepara など港に近いクラスターに比べると内陸に位置することや、informal な形態にある SMEs が多いことを考慮すると、survival cluster としての特徴も兼ね備えている。

### クラスターと開発プロジェクト

クラスター開発は世界的に広く取り組まれており、Solvell, Lindqvist and Ketels (2003)によると、マイクロ経済的なビジネス環境に焦点あてること、個々の企業や広域の産業セクターではなく、「クラスター」の競争力改善に長期的に取り組むことがクラスター・イニシアティブの特徴となっている。費用面では、活動の seed money としての資金投入が目立っており、これまでの補助金とは一線を画すものである。クラスター開発にとってより効果的な方法は、Cluster Activation であり、クラスターが高い生産性やイノベーションを達成することを阻んでいる深刻なボトルネックを取り除くために、クラスター参加者が共に活動することを促す(Ketels 2003)。この Cluster Activation は、セクション2で取上げたポーターのダイヤモンド・モデルを構成する 4 要件のうち、対象となるクラスターではどの要素が十分機能していないのか分析し、本来期待できる機能を達成すべく方策を採ることにもつながる。

### A 村木工家具クラスターでの取り組み

A 村木工家具クラスターの現状を dormant cluster であるとするれば、いかにしてクラスター・ダイナミズムを獲得するかがプロジェクトの焦点となる。プロジェクトの実施はプロジェクトに賛同するクラスター企業が中心となり、地方政府や近隣研究機関(大学)、バイヤー、BDS を巻き込む形で体制を整えている。プロジェクト初期に何度も重ねたワークショップを通じ、クラスター開発シナリオがま

とめられた。

主なアプローチとして個別SMEsの技術面でのアップグレーディング、クラスター企業間のリンケージ強化、対外的連携の強化という3つの視点を導入したが、パイロットプロジェクト<sup>1</sup>期間は約1年間と限られていたため、長期的なビジョンにつながるようなそれぞれにおいて第1ステップの達成を目指した。アクションプランは、クラスター診断、組織強化、家具に関する専門知識及び技術の習得、経営手法の修得、見本市への参加などのアクションプランを、Joint Actionとして試みた。つまり、これらのアクションプランの全ての工程を通じ、これまで企業間で協力することがほとんどなかったクラスター企業間の連携を強化することを狙った構造になっている。

クラスター開発プロジェクトを通じて、A村木工家具クラスターが直面していたダイヤモンド構造はどう変化しただろうか。需要条件では、展示会への共同出展によりそれまではクラスター内のコレクターやトレーダーに頼りきっていたSMEsが直接国内バイヤーだけでなく欧米のバイヤーにプロモーションする機会となった。要素条件面では、品質についてこれまで特に考えることなく生産していたSMEsに対し、数々のワークショップと技術専門家の個別訪問による指導を通じ原材料である木材や加工技術における品質管理への認識を喚起したといえる。また、銀行関係者や組合金融関係者との交流により資金アクセスの改善と、木材業者をプロジェクトに取り入れることによって原材料の安定供給にも兆しを見ることができた。企業戦略・競争環境では、これまでの不信感を払拭すべく1年間という短い期間の中でプロジェクトの主体をクラスター企業におくとともにワークショップや会議を頻繁に重ねることにより、新たな連携を生み、Joint Actionを実現することができた。関連・支援産業との関係は、バイヤー型あるいは近隣のBDSプロバイダーを技術専門家と共にプロジェクトに組み込むことにより、支援サービスへの壁を取り除きながら、インドネシアの人材を活用することによりインパクトを浸透させることに努めた。また地方政府とのリンケージを強め、政府の関心と支援を強化している。

## おわりに

発展途上国にクラスター政策を応用する場合には、往々にしてクラスターが **mature** でなく **incipient** であり、また **dynamic** ではなく **dormant** であり、**survival** である現実を目の当たりにすることになる。発展途上国でクラスター・アプローチを展開する場合には、停滞しているクラスターにいかにかダイナミックを発生させ、成長させるかが課題となる。その際には、クラスター開発の直接的なインパクトと間接的インパクト、あるいは短期的インパクトと長期的インパクトについて十分検討しなければならない。ポーター型クラスター・イニシアティブは、競争力のあるクラスターをさらに強めることによって国や地域の競争力強化を目指している。潜在的成長力のある(成長基盤のある)クラスターに支援を集中させることによって、その他のクラスターや地域を牽引する成長システムを達成できるかもしれない。長期的にみれば、クラスターだけでなくその地域の雇用回復や所得創出にも正の効果期待できる。ただし、ポーター型アプローチは直接的な目的に貧困削減を掲げておらず、

<sup>1</sup> パイロットプロジェクト期間は2002年10月から約1年間。参加企業は60SMEs。

対象となるクラスターは *incipient* や *dormant* クラスターではなく、*advanced* あるいは *mature* クラスターが中心となるため、支援が投入されるクラスターはさらに成長し、支援を受けない *incipient* あるいは *dormant* であるクラスターとの格差が広がる可能性があり、慎重に効果を検証しなければならない。

発展途上国にクラスター開発アプローチが導入されて以来 10 数年が経過している。従来は産業や企業の成長が主眼であったクラスター開発に貧困や地域ブランドという新しい視点を導入し、遠隔地や農村地域の実情に適したプロジェクトの展開を試みる時期に来ている。農村クラスター開発アプローチを確立するために、さらなる理論的・実証的分析が急務である。

### 参考文献

- Humphrey, J and Schmitz, H (1995), *Principles for Promoting Clusters & Networks of SMEs*,
- Ketels, C.(2003), *The Development of the Cluster Concept: Present Experiences and Further Developments*, Prepared for NRW conference on Clusters, Germany, 5 Dec, 2003
- Malmberg, Solvell and Zander (1996), *Spatial Clustering, Local Accumulation of Knowledge and Firm Competitiveness*, *Geografiska Annaler Series B: Human Geography*, Vol. 78, No. 2., pp. 85-97, 1996
- Poter, M.(2003), “The Economic Performance of Regions”, *Regional Studies*, Vol 37. 6&7, pp549-578, August/October 2003
- Solvell, O., Lindqvist, G. and Ketels, C.(2003), *The Cluster Initiative Greenbook*, Bromma tryck AB, Stockholm 2003.
- 藤田(2003)「日本の産業クラスター」石倉洋子・藤田昌久・前田昇・金井一頼・山崎朗『日本の産業クラスター戦略:地域における競争優位の確立』有斐閣、2003
- 清成忠男・橋本寿朗(1997)『日本型産業集積の未来像』日本経済新聞社